



Takayuki Yamada

山田孝之・プロデューサー

誇りに思えるような  
作品にしたい



僕は、エキストラとしても参加しました。撮影は緊張したけど、新鮮な空間で楽しかったです。インタビューは緊張してしまっただけ、握手できてうれしかったです。

Q. ラインプロデューサーとは、どんな役割をしているのですか？

A. ラインプロデューサーとは、予算内で機材やスタッフを集め、撮影を進めていく現場との橋渡し役です。出演者やスタッフの体調にも気を使わなければなりません。そうすることで映画のクオリティがあがると考えています。

Q. 炊き出しボランティアの方々が作った食事はどうでしたか？

A. 一年のほとんどをロケ弁で過ごしたので、温かいご飯が食べられるのは本当にありがたいです。何度も打合せをしてメニューを考えてくれて感謝しています。体が温まる食事にスタッフはとても喜んで食べていました。

Q. 高校生に向けて何かありますか？

A. 興味があっても「やる」「やらない」では違いがあると思います。大人になつていく中で、やって後悔することは自分の経験になります。やらないままだと、ただ後悔して終わり。いろいろな選択があるでしょうが、一歩踏み出してチャレンジしてほしいですね。

Q. 映画への意気込みをお願いします。

A. すごくいい映像が撮れたと思います。ここまでこれたのは、鹿角市の方々のケアがあったからです。映画は監督の作品だとよく言われますが、スタッフや鹿角市の人たちも自分たちの作品だと考えてもらっていいと思います。皆さんにとっての代表作になるように完成まで頑張っていきたいと思っています。

皆さんにとっての  
代表作になるように

角田道明・ラインプロデューサー



Michiaki Tsumoda

お二人を取材して、映画を成功させるという強い思い入れが伝わってきました。良い映画になって、この映画で鹿角を知ってもらいきっかけになってほしいです。



Q. プロデューサーの仕事はというと、思ったきっかけは何ですか？  
A. 俳優としての経験で、疑問や改善点について考えることがあり、芝居だけでなく、映画がどうやってできるか学び、作る立場になれば、改善できるんじゃないかと考えたからです。  
Q. 市内の高校で撮影しましたが、高校生に一言お願いします。  
A. 僕は15歳から仕事をしています。高校生活は一度しかないもので、やりたいと思ったことは、とにかくやっておいたほうがいいと思います。  
Q. 俳優以外にもいろいろなお仕事に挑戦されていますが、新たなチャレンジに怖さを感じたり躊躇したことはありませんか？  
A. ほぼないです。ほとんどの人は、最悪のリスクを考えて行動に移せませんが、行動すればチャンスは必ずやってきますし、仮に失敗しても成長につながります。自分を信じて行動すればいい。進んでいる以上は次に失敗する確率も下がります。まず行動することが大事だと思います。  
Q. 市民にメッセージをお願いします。  
A. この映画は、本当に自信があります。地元の人たちも映画を通じて、普段と違う鹿角を見れると思います。また、実行委員会や炊き出しボランティアの方々には本当に感謝しています。鹿角市の皆さんには、すべて秋田で撮影したということを誇りに思ってもらえるような作品にしたいと思っていますので、公開を楽しみにしてください。

映画を陰で支えた  
炊き出しボランティア



撮影期間中、出演者やスタッフ、エキストラのため、昼食と夕食の炊き出しを行ったボランティアの様子も高校生広報室員が取材してきました。



鹿角ポーズ(自給)で盛り上がりました!



調理スペースには、たくさんの方々から提供いただいた食材が並んでいました。この食材を使い、「出演者とスタッフの方々が頑張れるように」と心を込めて作っていました。多い時には、100人分もの料理を準備したとか。



雪の中での撮影となったため、できるだけ温かい状態で食べてもらえるように、その場で料理を温めなおして盛り付けしていました。



食事スペースには、その日のメニューと調理した人たちが、食材を提供した方などが手書きで掲示されていました。



撮影が深夜におよぶと夜食も作っていたそうです。皆さま本当に大変な作業でした。

